

平成 23 年(ワ)第 1291 号・平成 24 年(ワ)第 441 号伊方原発運転差止請求事件

## 意見陳述書

2012年 5月29日

松山地方裁判所民事第2部 御中

### 原告共同代表

福島県（会津地方）出身  
インマヌエル松山キリスト教会  
牧師 須藤昭男

私は、原告須藤昭男といたします。

福島県会津地方出身で、生家は曹洞宗龍藏寺の檀家ですが私自身は学生時代に様々な悩みの中で、キリスト教会に出席するようになりクリスチャンとなりました。大学を卒業して一般企業で働いていたのですが、自分の生涯をこのキリスト教伝道に用いて世のため、人のために生きようと決意、牧師の道を選びました。そして40年前にこの愛媛県松山市でキリスト教伝道を開始した者です。この度は、松山地裁 裁判長の前で、伊方原発運転差止請求原告団の共同代表として意見陳述ができますことを感謝しております。

2011(平成23)年3月11日の東京電力福島第一原発事故が occurred。連日テレビで報じられる悲惨な光景、今も消えない原発が爆発する様子、原子炉の温度は関係者の英知をもってもなかなか下がらないと伝えられて、事の重大性

が少しずつわかってきました。そのような中に被災地から聞こえる東北訛りの悲痛な叫び声、故郷のために何かをしなければとおもいながらも何もできない。

何かをしなければ！気持ちは逸るのですが、体力も、資力も、知力もない、やるせない気持ちを

被災地の 訛りの叫び 胸を刺す

ただ祈るのみ 老いのわが身は と、短歌

に歌い慰めていたことです。

時は流れ、お花見の季節になったとき、「原発事故はタイヘンダゾー！今年は観光バスが一台もこねーんだぞ」故郷の悲惨な様子を伝える知人からの電話でした。

恐るべし！原発、原発の恐ろしさを知らされたことです。

私には、原子力発電に古くから関わってきた恩人がいました。今も原発の現場で働き家族を養っている教え子がいます。そういうことから原発と聞きますと何か誇らしくさえ覚え、伊方原発へも知人を案内し得意になってその説明を聞いたことがあります。しかし、忘れられないあの3・11の東京電力福島第一原発の事故は、私の原発に対しての見方を全く変えてしまいました。

あの伊方原発は大丈夫だろうか？

東京電力福島原発の関係者は「大丈夫ですよ。大丈夫、絶対安全だから」と自信たっぷりだったのです。その福島第一原発があの状態ではないか。伊方原発は大丈夫だろうか？ 単純に「伊方原発をとめなければ」と思いました。そのような

中で、「伊方原発をとめる会」の設立に加わるようになり福島を繰り返してはならない、唯この一つの願で「伊方原発運転差止請求原告」になったのです。

あの東京電力福島第一原発事故は、測り知れない放射性物質を拡散し、二本松陸奥安達（みちのくあだち）管内だけでも6、600トンの米、30キロ入りの米袋で22万袋の米は、作付が始まった今でも（平成24年5月14日現在）倉庫に積まれたままなのです。この状態のなかで「放射能被害の作物は、燃やすな、埋めるな、動かすな」と言われながら農作業に当たらなければならない農家の人々の気持ちはどのようなものでしょうか。加えて、今になっても故郷に帰れないでいる避難生活者をだしたのです。これらのことは筆舌に尽くしがたい悲しい事実として永劫忘れてはならないのです。

しかし、この悲しい事実と犠牲は、私たちにとても大切なことを教えてくれたのだと確信しています。

人間は、失敗したり事故を起こしたりしては学び文明を前進、成長させてきました。けれども、東京電力福島第一原発の事故は、今までの事故や失敗とは全く異質なもののなのです。原発が事故を起こすと、見えない、臭わない、放射性物資が拡散し、人間はこの事故を完全に抑え処理する手段を持ち合わせていないということを実証したのです。

長いこと獣医師として働き、今は引退、郡山に住んでいる老人は、「あの辺の酪農家は苦労したのだ。それが原発であのザマ（様）だ！郡山に避難している人も

いるが気の毒で顔、見ランギソ。（可哀そうで顔を見ることでができない。）先祖伝来の故郷喪失だ！故郷喪失の漂流民になったみたいだ。ナジョシテ（どうして）いいかわかんねだぞ！政府は除染だとか、帰還可能なように発言していたが、何だ！「永久に居住不可の地域」とか「仮の町」を設けることも考えなければとか、言い方が変わってきている。俺たちは老人だから良いにしても、子供たちはどうするんだ！」語気強く、やるせない気持ちをぶちまけていました。

東京電力福島第一原発から約100キロの会津地方の高校に勤務する方は「原発事故前は0.04~0.05マイクロシーベルトだったのですが事故後は、学校に設置されたモニタリングポストの値は0.227という低線量被曝の状態が続いているのですよ。この状態が生徒や地域の子供にどのような影響があるかとても心配です。食べ物も注意していますがシイタケから基準値を超えるセシウムが検出されたと聞いたときはショックでしたよ。」と話してくれました。また、野球部で活躍している息子さんを持つという父親は、「3・11以後もグラウンドで元気に練習をしてきました。その息子が、妹たちに「俺たちは長生きできねーな」と話していたんですよ。子供は半分冗談を言っているのだろうと思いつつもドキットしましたよ。」と語っていました。故郷の子供たちがこのような気持ちでいるのかと思うと本当に悲しくなったことです。

同じ集落で生まれ育った幼馴染は、中学の教師をし退職しています。彼は「あの時、もっと強く運動していればと悔まれるよ。原発を誘致しようとする人たちは

「ここでは、仕事がないんだ！」と言うんだよな。命の安全を金で売ることかと言いなからどうすることもできなかった。須藤君、原発の繁栄は一炊の夢、その被害は全ての物に、永久に、永遠だよ！繁栄の何倍もの被害を受けてしまった。」と悔しさをにじませていました。確かに東京電力福島第一原発事故で拡散した放射性物質は、大気を汚染し、大地を汚染し、生ける者の全てを音もなく、確実に死へと追いやっているのです。

この年の3・11の集會に福島からの証言者としてきてくださった長沼一司さんは「伊方原発が日本1長い佐田岬半島の付け根にあるのには驚きました。事故が起きたら伊方から先の人たちはどうなるんですか」と言われたものですから「船で避難するのではないですか」と私は答えたのです。「とんでもない、原発が事故をおこすようなときは、船など使える状態ではないんですよ、伊方原発から先の人たちは見殺しになる可能性がある」といって、放射能汚染のために、福島の津波被害者の救援は放置されてしまい、あの3月の寒さの中、救援をまっていた人々が見殺しにされたという悲しい出来事を話してくれました。

4月28日の新聞「福島民友」の一面には全国的に有名な福島県三春の滝桜が満開になった様子を伝えていました。しかし福島県では今なお8つの町村（楢原町・富岡町・川内町・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯館村）が自治体ぐるみの避難を余儀なくされ、県内仮設住宅に避難している方は97、535人（県土木部調べ）県外非難者は62、736（復興庁調べ）人もの方が住み慣れた先祖伝

来の故郷を追われ不自由な避難生活をしいられているのです。測りしれない無念さがあると思います。故郷福島の人々の心に三春の滝桜が咲くのはいつになるでしょうか。東京電力福島第一原発事故の事実は「人間は原発と共存できない」ということを実証し見せてくれたのです。この事実を真摯に学び福島を繰り返してはならないのです。

原発をエネルギーとして用いることは、その廃棄物一つを考えても大きな負の遺産を子や孫に否、永久に残すことになってしまうのです。人間の行ってきたことには、失敗や事故がありそこから学び文明を開花させ進んできたことも事実です。しかし、この度の東京電力福島第一原発の事故は、人間にも制御できないものがあることを厳粛なうちに教えてくれたのです。この事実を真摯に受け止め、立ち止まり、大自然の前に畏敬の念を持つことです。畏敬の念のない知識は破滅をもたらすのです。「原発依存から離れ、この豊かな国、四国に、愛媛、瀬戸内海に福島を繰り返さない。」ということではないでしょうか。そのために司法の判断をお願いして私の意見陳述といたします。

ありがとうございました。